

ローマ人への手紙12章3-21節 「神に献げる生活」

1A 恵みによる賜物 3-8

1B 慎み深い考え 3-5

2B 勤勉さ 6-8

2A 兄弟愛 9-16

1B 愛と勤勉 9-12

2B 奉仕と謙遜 13-16

3A 隣人への愛 17-21

1B 平和 17-18

2B 悪への報い 19-21

本文

ローマ人への手紙 12 章です。午前に 1-2 節に集中して見てきました。3 節以降を見ていきますが、一つ一つの勧めがとても有益で、1-2 節だけで一つのメッセージ、何週間も話せるでしょう。けれども、大まかな流れを見ていきたいと思います。3 節から 21 節は、1-2 節における神のくださった原則に基づく勧めであります。それは、新たにされた思いによって、自分が神にどのように仕えて行けるのか、その正しい見方ができるということです。

3 節から 8 節までには、教会の中における賜物について、9 節から 16 節には兄弟愛について、つまり教会における愛の関係についてです。そして 17 節以降は、もっと教会外の人々に対してどう接していくべきか、ということが書かれています。それぞれにおいて、新たにされた思いの中で、自分を正しく見ていくことができ、高ぶることなく、かつ卑下することもなく、へりくだった歩みをするることができることを学ぶことができます。

1A 恵みによる賜物 3-8

1B 慎み深い考え 3-5

³ 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。

パウロは、これまでずっと、神の恵みによって、信仰をとおして私たちが救われることについて話してきました。神の恵みはすべての信じる者に与えられています。けれども、ここは、「自分に与えられた恵みによって」と言っています。これは、すべての人に与えられている恵みという一般的なものではなく、自分自身が個人的に、「自分は全く受けるに値しないのに、このような特権が与

えられている」というところにある、恵みです。

パウロの場合は、テモテへの手紙第一で、自分のことを「罪人のかしら」だと言っています。彼の個人的な恵みの証しを読みましょう。「Ⅰテモ 1:12-16 私は、私を強くくださる、私たちの主キリスト・イエスに感謝しています。キリストは私を忠実な者と認めて、この務めに任命してくださいました。13 私は以前には、神を冒瀆する者、迫害する者、暴力をふるう者でした。しかし、信じていないときに知らないでしたことだったので、あわれみを受けました。14 私たちの主の恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに満ちあふれました。15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。16 しかし、私はあわれみを受けました。それは、キリスト・イエスがこの上ない寛容をまず私に示し、私を、ご自分を信じて永遠のいのちを得ることになる人々の先例にするためでした。」パウロは、神が自分を忠実な者と認められたと言っています。これは、彼がそのような良い行いをしたからではなく、一方的に神がそう認められたのです。教会を迫害する者であり、神を冒瀆する者であり、暴力をふるう者だったのです。それにも拘らず、神は彼を使徒として任命されたという、大いなる恵みです。自分自身は、罪人のかしらなのです。けれども、憐れみを受け、彼がこれほどの憐れみを受けたのだから、神は自分にも寛大になってくださるのだという先例として、彼を立てたということです。

このように、自分の受けた恵みを思う時に、自分がどれほどのものであるのかという、正しい見方ができます。自分は、今、していることをしている価値など全くない。しかし、神によって立たされている、という自覚です。

そこで二つのことが言えます。一つは、「**思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。**」ということです。これは、いつも思っ**てはいけない**ということではありません。思うべき限度を超えて、ということです。そこで二つ目が、「**むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、**慎み深く考えなさい。****」自分に与えられた信仰の量りがあります。それぞれが、信仰の量りが違います。先ほどの恵みと同じように、すべての人が信仰によって救われていますが、それぞれに、信じている度合いが違います。その与えられているところの限度を良くわきまえて、その中でよく考えるということです。それを「**慎み深く考えなさい**」ということです。

自分が、いろいろと用いられているので、自分はたいした人物だ、と思っていたら、思い上がりです。実は、自分には多くの課題、問題があって、それで神の憐れみによって、そこに置かれている、ということさえあるのです。北イスラエル王国にヤロブアム二世がいました。彼の時代に、なんと領土がものすごく広がりました。「Ⅱ列王 14:25a 彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。」とあります。シリアから死海のところまでの領土になったのです。けれども理由が、このとおりです。「14:26-27 イスラエルの苦しみが非常に激しいのを、【主】がご覧にな

ったからである。そこには、奴隷も自由な者もいなくなり、イスラエルを助ける者もいなかった。27【主】はイスラエルの名を天の下から消し去ろうとは言っておられなかった。それで、ヨアシュの子ヤロブアムによって彼らを救われたのである。」ヤロブアムは先代の王たちと同じで、主の前に悪を行っていたのに、神が彼らを憐れんで、それで領土をそれだけ広げてくださったのです。

時に、このようなことを言われると、自分はだめだ、何もきちんとできない、と卑下することがあります。これも実は、思い上がりの裏返しなのです。私たちはすべて恵みによって立っています。自分には、神に仕える資格などないのに、それでも立っているのです。そこに信仰があり、自分にはその資格がなくとも、それでもこれこれのことをしなさいと命じられているから、行うのです。それを、「私は、そんな、何もできません。」と断っているのは、神のその恵みに対して不遜であるのです。そして、卑下している人は、逆に何かをし始めると、高ぶります。信仰によって行うのではなく、自分でできることをやっているだけにしかすぎないからです。「**慎み深く考えなさい**」とは、否定的に自分を考えろということではなく、むしろ、神の恵みによって与えられたものを、信仰によって喜んで行わせていただくという、積極的なものです。

4 一つのからだには多くの器官があり、しかも、すべての器官が同じ働きをしてはいないように、⁵ 大勢いる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、一人ひとり互いに器官なのです。

思い上がらない、慎み深く考えるというのは、まさに、教会が一つのキリストのからだで、各人がそれぞれ器官であるという考えに基づきます。自分に与えられた分があります。そして、自分に与えられた分をしっかりとこなしていく中で、全体が体として機能します。また、他の部分が必要ないどころか、本当に必要で、その人がいるからこそ、自分もいるのだと慎み深く考えることができます。自分が、この人よりも優れていると思っていたら、知らなければいけないことまで知らないのです。なぜなら、それは、手が足に向かって、「お前は手ではないから、足は要らない」ということを言っているのに等しいからです。先ほど卑下することについて話しましたが、「私は手ではないから、からだに属さないとして」として、本当は足なのに、離れていったら、体全体が崩れてしまいます。

体は、一人ひとりが主張をしないので成り立ちます。けれども、恵みによって、自分の立たされていることにも誇りを持ち、喜んで主の前で奉仕をします。

2B 勤勉さ 6-8

⁶ 私たちは、与えられた恵みにしたがって、異なる賜物を持っているので、それが預言であれば、その信仰に応じて預言し、⁷ 奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教え、⁸ 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれを行いなさい。

賜物は、恵みによって与えられています。ここでのパウロの焦点は、私たちがこれから御霊による賜物が与えられるということではありません。そうではなく、それぞれがすでに賜物が与えられていて、それをしっかり用いて、神に仕えなさいということです。勤勉さが問われています。パウロは、「異なる賜物」と強調しています。それぞれが、異なります。ですから、「他の人たちがしているから、私もする」という漠然としたものであってはいけません。また、自分に割り当てられた分を、出来る時にはする、出来ない時は知らない、という無責任なこともできません。また、他の人たちのやっていることと、自分をいちいち比べたり、卑下したり、あるいは見下げる暇さえありません。

預言は、教会の徳を高めるために、神から与えられる言葉です。言葉についての奉仕です。奉仕というのは、もっと実務的なことです。使徒の働きでは、給仕をする者として七人が選ばれましたが、その執事のことです。教えるのは、聖書の教えを教えることです。勧めは、教えられて分かっているのになかなかできない、実行していない時に励まして、行えるように促すことです。分け与えるとは、その通り惜しまずに与える賜物のことです。指導する人は、退屈になったり、疲れてあきらめたりせず熱心に指導します。そして、慈善とありますが、憐れみを示すことです。弱った人、困っている人々を助けることです。

2A 兄弟愛 9-16

1B 愛と勤勉 9-12

9 節から 12 節は、兄弟愛を抱き、勤勉に仕えることについての勧めです。

⁹愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れないようにしなさい。

キリスト者が愛しなさい、という命令は、主ご自身から受けています。したがって、愛するという命令は知っています。しばしばそこに「偽り」が入ってきます。それは愛といいながら、悪に対して妥協していること。善を選び取っていないことです。つまり、表向きは愛のため、ということで善を行なっているようで、実は悪意を持っていたり、不純な動機が働くことがあります。「キリストの名による、世の動き」とでも言ったらよいでしょうか。「あの人、全然愛がないわね。」と言って、噂話をする井戸端会議をしていたら、単なる世の中と変わりありません。愛がないといって、自分たちに愛がないことを証明しているようなものですが、そういったものが「偽りのある愛」ということです。

ある方が、こんなことをおっしゃいました。「サークルであれば、仲良くやれる。けれども、キリスト者として集まる時に、いろいろな困難が生じる。」そうなんですね。私たちが集まると、丸裸の自分が示されます。それは他の人に示されるというのではなく、自分自身のありのままの姿を神によって示されるのです。キリストとの関係が、互いに関わりによって露わにされるのです。しかし、それこそが神の意図です。愛を実践することによって、私たちは、ただ教えられているだけで満足していたところから、本当の意味でキリストを知ることができます。

¹⁰ 兄弟愛をもって互いに愛し合い、互いに相手をすぐれた者として尊敬し合いなさい。

兄弟愛です。同じ神の家族です。だから、主にあって兄弟であり、同じ神から生まれた者たちです。このことを私たちは、最近まで、平日の学びでヨハネ第一を通して学んできました。その時に大事なものは、「相手への敬い」です。これがあって始めて、一つの家族、一つのからだとして機能します。ピリピ人への手紙で、問題になっていたのは、二人の女性の働き人が対立していたために、教会全体に軋みが生じていたことです。そこでパウロはこう言いました、「ピリ 2:3-4 何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい。4 それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。」

¹¹ 勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。

これは、6 節から 8 節までにあった、賜物にしたがって主に仕えることです。勤勉で怠らない、ということです。時間が空いたらやります、後は知りません、ではありません。気が向いたら行きます、でもありません。与えられたものをしっかりこなします。そして、霊に燃えます。情熱をもって行きます。義務的に、いやいやながらではなく、このことをすることで主に仕えているのだという自負を持ちます。

¹² 望みを抱いて喜び、苦難に耐え、ひたすら祈りなさい。

苦しいこと、困難なことは、しばしば襲いかかります。その時に私たち教会に必要なスピリット、精神は、「望み」です。望みえない時に望むことを私たちは学びました。望んで喜んでいるということ。そして、耐え忍んで、祈ることですね。祈り、祈り、また祈り、ひたすら祈ることです。

2B 奉仕と謙遜 13-16

13 節から 16 節は、もっと具体的に助けを差し伸べるような奉仕について書いてあります。そして、謙遜になることについても書いてあります。

¹³ 聖徒たちの必要をともに満たし、努めて人をもてなしなさい。

昔、使徒たちの時代には、社会的な福利が少なかったものです。その代わりに、旅人は必ず迎え入れるという習慣がありました。今でも、中東やアラブの人たちは、見知らぬ人たちでも必ず迎え入れて、必要を満たすことをします。キリスト者は、キリストにある者という理由だけで、その具体的な助けの手を伸ばしなさいということです。

私たちには、これをどのように当てはめればよいのか？今の社会は、福祉は福祉制度があり、

それぞれ制度化されて、多元化しています。ゆえに、問題が出てきても、それがかえって見えなくなっています。例えば、貧しいとしたら、貧しい恰好して、それなりの生活をしています。けれども、日本社会では、選んでホームレスになる人もいれば、相対的貧困といって、スマホとかは持っているけれども、食べるのに困っている、ということが意外にあります。また、物理的には困っていません、精神的に、心理的に追い詰められることもあるでしょう。なかなか見えないものです。

そこで大事なのは、自分のことだけを考えないということです。他の兄弟たちが、何が必要なのか、どういうことをしたらその人が助かるのか、想像力を働かせて助けるということです。そして共感すること。そして、必要ならば具体的に時間を取って助けることです。

¹⁴ あなたがたを迫害する者たちを祝福しなさい。祝福すべきであって、呪ってはいけません。

キリスト者であるがゆえに、嫌がらせや、何か不利な条件に置かれることがあるでしょう。当時は、具体的な迫害がありました。けれども、教会の中でそういったことをした人々を悪く言っていく、ということは避けたいものです。呪うのではなく、祝福します。むしろ、嫌なことをしてきた人のために祈り、その人をどう祝福するのか？を考えていくのです。

¹⁵ 喜んでいる者たちとともに喜び、泣いている者たちとともに泣きなさい。

キリストのからだですから、どこか一部が苦しめば共にその痛みを感じ、どこかが喜べば、自分もうれしくなります。「Iコリ 12:26 一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」私たちは、バプテスマを受けた兄弟二人のことで、自分たちのことのようにして喜びました。これが、キリスト教会の姿ですね。泣いている人がいれば、共に泣きます。

¹⁶ 互いに一つ心になり、思い上がることなく、むしろ身分の低い人たちと交わりなさい。自分を知恵のある者と考えるはいけません。

パウロの実践のための教えの根底には、これです、「互いに一つ心に」なるということです。思い上がってはならないというところから、パウロは語り始め、教会の実践においてもそれを具体的に示していくための勧めをしています。

具体的には、「身分の低い人たちと交わりなさい」ということです。ローマ社会では、自由人と奴隷の階層がくっきりと分かれていました。教会に入れば、なんと奴隷の身分の兄弟が牧会者となり、その主人がその信徒であったということも十分あり得ました。キリストにあって一つになっているのですが、それでも、いつの間にか身分の高い人のほうに近づいていってしまう、ということがあ

たのでしょう。ヤコブの手紙で、心で差別してしまっている案内役の問題が取り上げられています。イエス様も、このことを良く教えられましたね。人々が上座を好んでいる食事の席で、貧しい人たちを招けば、見返りが無いので天からの報いが大きいことを話されました(ルカ 14:13-14)。

自分が何者であるかのように思うと、このように影響力のある人のところに近づいていったりする傾向があるでしょう。世の中ではよくある話ですが、教会の中でさえ、その愛に偽りが入り込んでしまう危険があります。そして、思い上がると、自分を知者であるかのように思うのです。自分は、これこれ、こんなことができると自負するのです。しかし、キリスト者の教会における実践は、初めから終わりまで、自分に与えられた恵みによって、その中で慎み深く考えていくことであります。

3A 隣人への愛 17-21

1B 平和 17-18

17 だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人が良いと思うことを行うように心がけなさい。¹⁸ 自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい。

ここからは、教会外の人々、私たちが一般の社会で触れる人々に話をパウロは移しています。13章においては、社会以上に国の権威について触れますが、ここでは一般社会です。パウロの生きていた社会には、悪がはびこっていました。今もはびこっていますが、ローマは特にひどかったでしょう。そこで、ユダヤ人の中では悪に対しては戦わないといけないという、熱心党員のような思いが優勢になっていきました。その中でイエス様は、「マタ 5:39 しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つ者には左の頬も向けなさい。」と言われました。ローマ人やギリシア人の中でも、何かしらの動きはあったでしょう。

しかし、そこでキリスト者は、真逆の倫理観をイエス様から命じられたのです。「だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人が良いと思うことを行うように心がけなさい。」ということです。悪に対して悪で返したら、自分自身がその悪に染まることになります。悪に対する最大の武器は、良いことを行うことです。ここで、「すべての人が良いと思うこと」とあります。全体のことを考えて、良いと思われることを選択するのです。ですから、悪に対して多くの人が被害を受けていたら、その悪にしっかりと対峙することも十分にあり得るでしょう。良いことを心がける、すべての人にとって良いと思われることを選び取る、ということです。そこから出てくるのは、「平和」という実ですね。二つの分かれてしまうような問題に対して、すべての人がそれでよいと見る知恵のことが必要です。

そこで次の節、18節は、「すべての人と平和を保ちなさい。」とパウロは勧めています。彼は、けれども、現実的な対応を勧めています。一つは、「自分に関することについて」は、平和を保ちなさいと勧めています。不正や悪がはびこっている中で、すべての争いに対して平和ということは、成

り立ちません。自分に関する限りの平和です。次に、「できる限り」ということです。自分ではどうす¹ることもできない、争いは確かにあります。

争いの絶えない当時の社会の中で、キリスト者にある平和は、驚くべきものだったことでしょう。それが結局は、伝道につながったことでしょう。人々が引き寄せられ、イエス様への信仰を持ったに違いありません。私たちの間にも、平和がありますよう祈ります。オリンピックの時期になりましたが、一つの写真を、信者ではない人がツイートしていました。手を組んで祈り、感謝してから、選手村の朝食をいただいている選手の姿です。マスコミでは、選手村についての不平不満が取りざたされて、ある国は福島産のは食べないとか、悪いニュースが多いので、この方はとても感動したようです。どうも、クリスチャンっぽいなおもって調べると、インド人のメアリー・コム(Mary Kom)という女性ボクサーで、熱心にイエス様を伝えるクリスチャンのようです。なんと、インドでは有名な方のように、「メアリー・コム」という映画まであるようです。²たった一つの食前の祈りが、平和の証になっています。



2B 悪への報い 19-21

そして、パウロは復讐するという、世にある文化について、キリスト者としてどう対応すればよいかを教えます。

¹⁹ 愛する者たち、自分で復讐してはいけません。神の怒りにゆだねなさい。こう書かれているからです。「復讐はわたしのもの。わたしが報復する。」主はそう言われます。

ダビデの生涯を思い起こします。彼は一貫して、義父である王サウルに対して、仕返すことを拒みました。主の手に任せることを積極的に話しています。詩篇を見てください、そこには、ダビデの敵に対する呪いに近い、いや呪っている祈りさえあります。それは、彼が、唯一、復讐する権利のある方、主に任せているのです。ダビデは、復讐することは、神にしかできないこと、神にしか許されてないことをやってしまうということでした。それで、自分の手で殺さなかったのです。

私たちに対しても、そのようであるように教えています。日本では、あからさまな復讐は少ないでしょう。けれども、恨みの文化は根強くあります。一度、受けた悪に対して、いつまでも恨み続けて、それを時があるごとに持ち出すということを行います。そこに、恵みはありません。赦しがありません。私たちは、こうした恨みの文化に抗わないといけません。拒むのです。復讐は神に任せます。

²⁰ 次のようにも書かれています。「もしあなたの敵が飢えているなら食べさせ、 渴いているなら飲

¹ https://twitter.com/nobby_saitama/status/1418394599899291649/photo/1

² <https://www.netflix.com/jp/title/80015785>

ませよ。なぜなら、こうしてあなたは彼の頭上に 燃える炭火を積むことになるからだ。」²¹ 悪に負けてはいけません。むしろ、善をもって悪に打ち勝ちなさい。

悪に対して自分で復讐しないことは、弱々しいことではありません。むしろ、このみことばにあるように、相手が神の怒りを受ける根拠となります。むしろ、彼らを憐れむことができます。報いるなら、善で報いなさいというのです。そういった意味での復讐はあるでしょう。悪に対して善いことで返しをします。

今回は、さらに社会的な生活におけるキリスト者の姿勢を見ていきます。国や上に立てられている人々に従うということで生きるということです。これは、無理！とまた思うかもしれませんが。けれども、神の憐れみによって、生けるささげ物として私たちは自分のからだを献げています。思いを新たにして、自分を変えていただいています。その中では、その真逆の生き方は可能なのです。